

わたしたちの生活を拓く学級活動

熟考サイクルを生かした話し合い活動を通して

築上町立築城小学校
教諭 濱田 健太郎

こんな手立てによって…

子どもによる評価を取り入れた「発信」「意見」「質問」「付加」の熟考サイクルを生かした話し合い活動を行った。

こんな成果があった！

目的意識と仲間意識をもち、子ども自身の力で、「わたしたちの生活」をつくることのできるようになった。

1 考えた

第2期教育振興基本計画において、今後の社会の方向性を示す三つの理念として「自立」「協働」「創造」が示されている。また、学級活動の目標では生活づくりに参画することで自主的・実践的な態度を育成することが掲げられている。一方で学級活動（1）の一般的な課題として本時の活動が事後の活動につながらない、話し合いが活性化しないということが挙げられる。

そこで、目的意識、仲間意識を明確にもち、生活の充実・向上を図ることができる、つまり生活を拓く子どもを育成したいと考えた。そのために、子ども同士が活発に意見を交わす熟考サイクルを機能させる話し合い活動を行いたいと考えた。

2 やって見た

実践Ⅰにおいては「みんなで楽しめる集会をしよう」という議題で実践を行った。事前の活動では生活班が見つけた学級全体で仲良くなれていないという問題から議題化を図った。本時の活動では、熟考サイクルを機能させて赤白をもとにしたチームにすることを、質問、意見を繰り返しながら集団決定して、子どもたちの力で事後の活動を行うことができた。

実践Ⅱにおいては「えがおがふえる1学期がんばったね集会をしよう」という議題で実践を行った。事前の活動では生活班に加えて係活動も活用することで議題化を図ることができた。本時の活動では、考えを数値化して評価するカードを用いたことで、目的意識、仲間意識がより明確になった話し合いを展開して、その後、集会を実施することができた。

3 成果があった！

生活班や係活動といったグループを活用することで、学級の現状をとらえた問題を発見して、その解決を図る価値ある議題を選定することができた。

さらに、話し合いの発言を「発信」「質問」「意見」「付加」と位置づけて繰り返す熟考サイクルを機能させたことが、目的意識、仲間意識をもって話し合いを展開することにつながった。また、サイクルの中で、友達の考えを5段階で評価するスマイルカードを用いたことは、さらに目的意識と仲間意識を強め、生活の充実と向上につながる内容を決定し、実践することができた。

わたしたちの生活を拓く学級活動

熟考サイクルを生かした話し合い活動を通して

1	主題設定の理由	3
	(1) 教育の動向から	3
	(2) 特別活動の目標から	3
	(3) 学級活動(1)の一般的な課題から	3
2	主題の意味	4
	(1) わたしたちの生活とは	4
	(2) わたしたちの生活を拓くとは	4
3	副主題の意味	5
	(1) 熟考サイクルとは	5
	(2) 熟考サイクルを生かすとは	6
4	研究の目標	7
5	研究の仮説	7
6	研究の構想	7
	(1) 議題選定のためのグループ構成	7
	(2) 目的意識と仲間意識をもって考えをつなぐ評価の工夫	8
	(3) 知恵を出し合い考えをよりよくする板書の工夫	8
7	研究の実際	9
	(1) 実践Ⅰにおける実際と考察	9
	(2) 実践Ⅰの考察及び手立ての修正	13
	(3) 実践Ⅱにおける実際と考察	14
8	研究のまとめ	19
	(1) 全体考察	19
	(2) 成果と課題	20
	<参考文献>	20

わたしたちの生活を拓く学級活動

熟考サイクルを生かした話し合い活動を通して

築上町立築城小学校
教諭 濱田 健太郎

1 主題設定の理由

(1) 教育の動向から

第2期教育振興基本計画において、今後の社会の方向性を示す三つの理念として「自立」「協働」「創造」が示されている。中でも「創造」については「自立、協働を通じて更なる新たな価値を創造していくことのできる生涯学習社会」と示されている。子どもが、自主的に、友達とかかわり合いながら、学級で創造する生活は、その基礎となるべきものである。そこで、本研究においては、子どもがこれまでにはなかった新たな生活を創り出すことを目指すことにした。

また、21世紀型のスキルの一つとして汎用的な能力が挙げられている。ある場面で育成された能力がほかの場面においても活用することができることが求められている。本研究では、話し合い活動の中で身に付けた能力を事後の活動で生かそうとしている点からも意義深いと考える。

(2) 学級活動の目標から

学級活動の目標は、次の三つに分けて考えることができる。

①望ましい人間関係の形成 ②生活づくりへの参画 ③自主的・実践的な態度の育成

中でも②生活づくりへの参画とは、ただ教師から与えられた取組に参加するのではなく、子どもたち自身で活動内容、方法、役割を考えて、話し合い、決まったことに基づいて実践することを意味している。本研究においては、話し合い活動を通じて、子ども自身が参画することによる生活づくりを目指している。また、その中で仲間意識をもって活動する中で望ましい人間関係を形成することもできる。そして、目的意識を明確にもたせることで自主的に実践することができる子どもの姿を目指している観点からも本研究は意義深いと考える。

(3) これまでの学級活動(1)の一般的な課題から

話し合い活動、いわゆる学級会においては、これまでに様々な課題がある。その中でも本研究では次のような二点の課題に焦点を当て、それを改善するための話し合いを設定する。

●本時の活動で決まったことが事後の活動につながらない

本時で決定する内容が事後の活動が自主的・実践的な活動となるようなものとなるようにした。つまり、話し合い活動の柱の中でも方法の話し合いを重視するとともに、方法がよりよいものとなるような話し合いの仕方を本研究で設定したことは意義深いと考える。

●意見の発表に留まって、意見のやりとりが少ない

子どもの意見の単発の発表に終わることなく、多くの意見のやりとりを行い、よりよい集団決定ができるような話し合いの設定をした本研究は意義深いと考える。

2 主題の意味

(1) わたしたちの生活とは

わたしたちの生活とは、わたし、つまり個と別の個が同じ活動目標という共通する目的意識と仲間意識をもってつながった集団により活動することである。

わたしたちの生活には次の二つの意味がある。一つは目的意識であり、今の生活の問題に目を向けて、何とかよくしたいという目標を掲げ、それを達成したいと強く願い行動しようとする意識である。二つは仲間意識であり、同じ目標をもった集団のメンバーの一人一人が「この友達と活動したい、この集団でがんばりたい」と感じる意識である。これらの二つの意識があるからこそ個と個、さらに複数の個がつながりを持ち、「わたし」という一個人の生活ではなく、仲間同士で互いにつながり合う「わたしたち」の生活となり得る(図1)。

わたしたちの生活の範囲は学校生活そのものであり、学習指導要領に示されている学級活動の内容の共通事項で示される活動内容である。この中で、子どもは問題を解決しようとする目的意識や組織及び多様な集団の中で仲間意識をもちながら、これまでにはなかった新たな生活を創り出すのである。

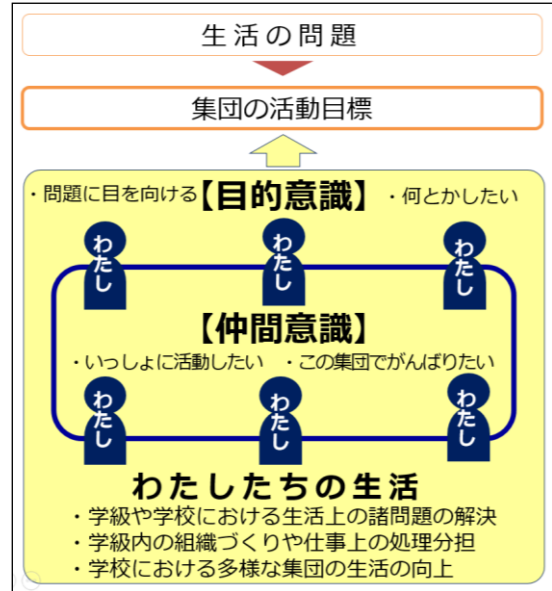
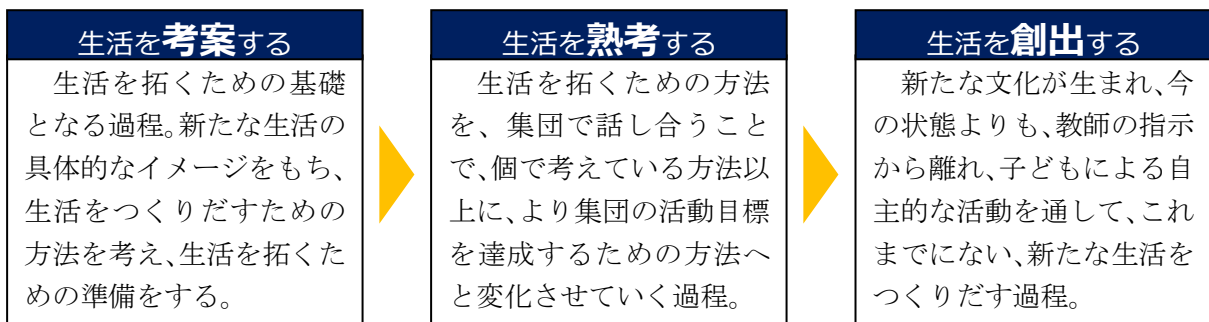


図1 わたしたちの生活

(2) わたしたちの生活を拓くとは

わたしたちの生活を拓くとは、生活上の問題の解決策を考え、話し合い、解決するための実践を行うという過程を通して、今現在の生活から新たな生活をつくりだすことである。

わたしたちの生活を拓くまでには三つの過程を経る。本研究においては、実践までの三つの過程を「考案する」「熟考する」「創出する」として、以下のように具体的に示す。



よって、本研究においては以下のような子どもの育成を目指す。

- 学級や学校の生活に関心を持ち、友達と積極的にかわり合いながら、今の生活を新たな生活に変えようと、自分たちの力で活動しようとする。 【関心・意欲・態度】
- 生活の問題を解決するための方法を考え、よりよい方法を判断するとともに集団の目標を達成するために、仲間意識をもって活動することができる。 【思考・判断・実践】
- 今の生活の問題が分かるとともに、その問題を解決するための方法や、今の生活をよりよくするために必要な新たな文化や実践すべきことを理解している。 【知識・理解】

3 副主題の意味

(1) 熟考サイクルとは

熟考サイクルとは、考えをつないで話し合うことで、はじめの考えからより活動目標達成に近づくような考えへと変えていくための仕組みのことである。

熟考サイクルにおける「考えをつなぐ」とは、一人のわたしが発した考えから関連させて、意見を述べたり、質問したりして、アイデアを付加したりすることである（図2）。サイクルが機能するに従って、はじめは一人が発した「わたし」の考えであったものが、次第に「わたしたち」の考えへと変わっていく。はじめに意見を発した「わたし」がよりよくなった考えを受け止めることでサイクルの循環が成立する。

熟考サイクルには、表1のように大きく四つの過程があり、それぞれに価値と特徴がある。

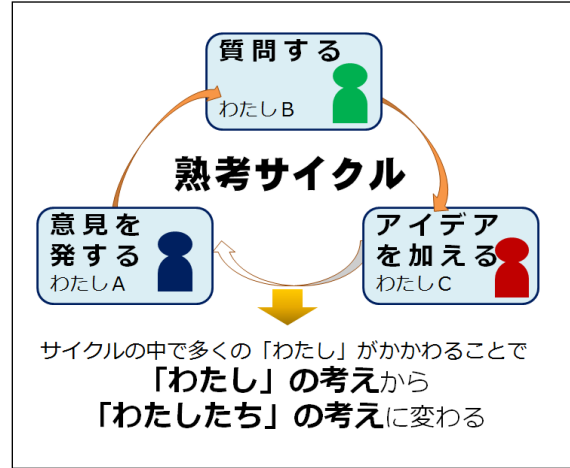


図2 熟考サイクル

表1 熟考サイクルの過程とそれぞれの価値

サイクルの過程	過程における価値・特徴
発信	自分がどのような考えをもっているかを発表する過程。相手に対して、自分の考えに加えて、自分の立場を明らかにする価値がある。
意見	出されている考えに対して、賛成なのか、反対なのかを述べる過程。ある考えに対して、どのような立場をとっているのかを明らかにする。
質問	出されている考えに対して、疑問に感じていることを問う過程。出されている考えの価値を明確にすることになる。
付加	出されている考えが不足している部分を補ったり、さらにアイデアを加えたりしてよりよくする過程。考えを強化することとなる。

これらの熟考サイクルの過程は、様々な組み合わせが考えられる（図3）。

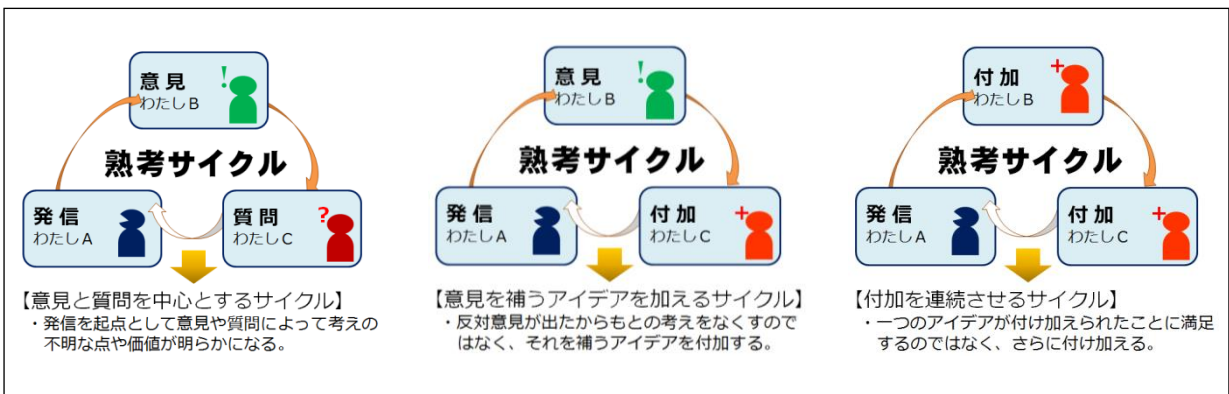


図3 様々な熟考サイクル

このように熟考サイクルには様々な組み合わせが存在することは、サイクルという型が存在しつつも、決まりきった型に当てはめてしまわないこと。つまり、この熟考サイクルは、子どもの自由な発想を保証し、創意工夫をいかすものと言える。

(2) 熟考サイクルを生かすとは

熟考サイクルを生かすとは、熟考サイクルを繰り返すことで生活の充実と向上に直結する内容、方法、役割を決定することである。

熟考サイクルを繰り返すとは、一つの結論に達するまでを1サイクルとする熟考サイクルを連続させることである。熟考サイクルを連続させる上で欠かせないのは目的意識と仲間意識である。目的意識があるからサイクルと連続させてより目標を達成させる考えへ高めようとする。また、仲間意識があるから、一人の「わたし」の考えで留まらずに考えをつないでいき、サイクルを連続させることとなるのである。

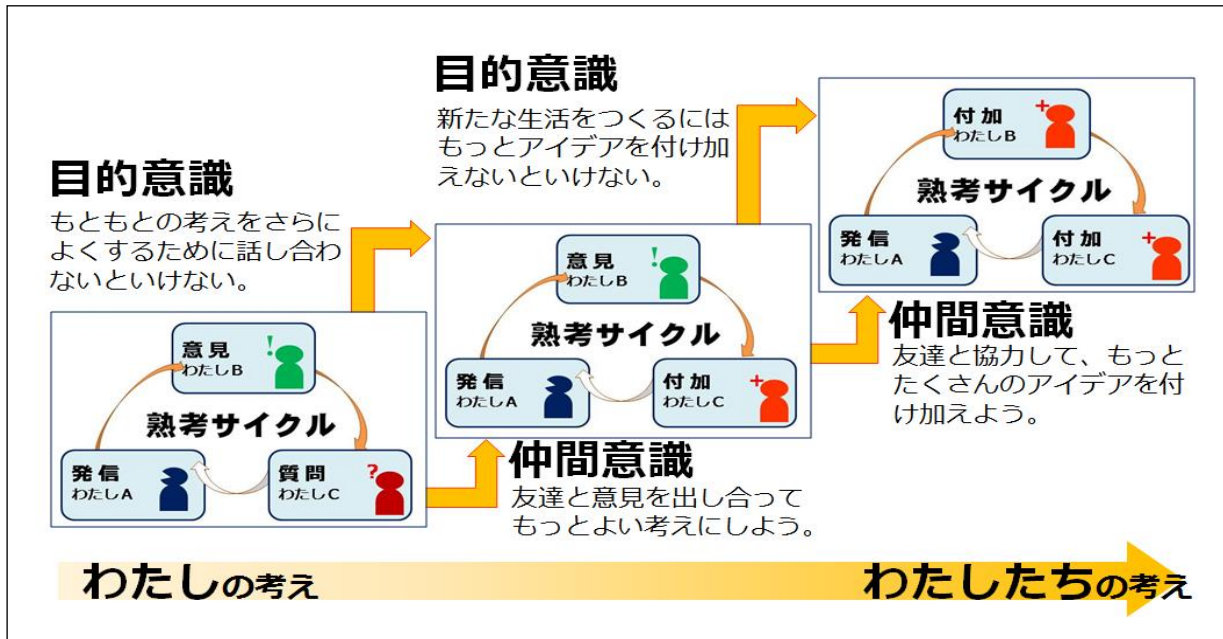


図4 熟考サイクルを生かす

このサイクルは繰り返せば、繰り返すほど、元々あったわたしの考えが練り上げられて、生活の充実と向上を図ることができるわたしたちの考えへと変わっていくのである。ここでいう生活の充実と向上を図るわたしたちの考えとは、図5のような要素から成り立っている。

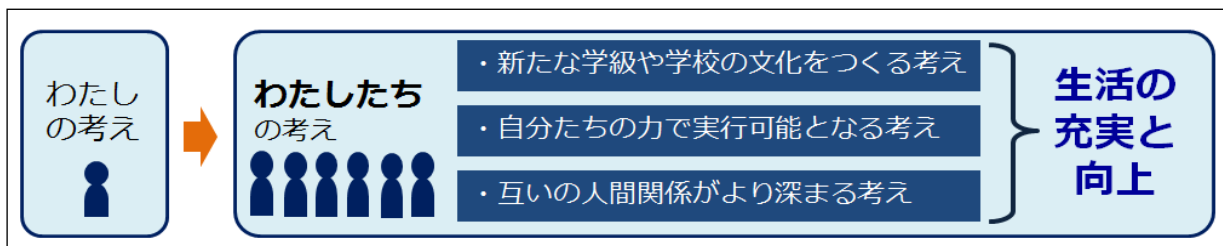


図5 熟考サイクルによってつくられる わたしたちの考え

熟考サイクルを生かして話合い活動を行うことには次のような価値がある。

- 考えを発表して終わりの発表会型の話合いではなく、互いに、質問し合ったり、意見を述べ合ったりする交流型の話合いとなることで、もとの考えをよりよい考えとすることができる。
- 型にはまった決まりきった定型的な話合いではなく、自由度の高い熟考サイクルを生かす話合い活動を展開させることで、一元的ではなく多様な考えをつくることことができる。

さらに、この熟考サイクルを生かす話合い活動は、図5に示した「わたしたち」の考えをつくり出すことにつながり、つまりわたしたちの生活を拓くような考えをつくることとなる。

4 研究の目標

子どもが今現在の生活から新たな生活を創り出すために、学級活動（1）の指導において、子どもが話し合いを通して考えを連続的によりよくする話し合い活動の工夫の有効性を検証する。

5 研究の仮説

学級活動（1）の指導において、話し合いを通して連続的に考えをよりよくする熟考サイクルの工夫として以下のことを講じれば、自らが新たな生活を創り出すことができるであろう。

- ・工夫1…議題選定のためのグループ構成の工夫
- ・工夫2…目的意識と仲間意識をもって考えをつなぐ評価の工夫
- ・工夫3…知恵を出し合い考えをよりよくする板書の工夫

6 研究の構想

（1）議題選定のためのグループ構成の工夫

生活を拓くことはつまり、新たな生活を創ることである。子どもが本当に新たな生活をつくろうとするためには議題に価値があり、魅力的なものでなければならない。そこで意図的なグループ交流を行うことで議題を選定するようにする。

議題ポストを設定するだけでは議題を見付けることができない。そこで、議題ポストを設定するだけではなく、計画的にグループで学級や学校生活の問題について話し合うようにする。2週間に一回、朝の活動、帰りの活動などの時間を活用して、話し合うようにする。また、グループは表2に示すような特徴を生かして三つのグループを活用する。

表2 議題選定のためのグループ

小グループ	見付ける問題	特 徴
生 活 班	学級の問題	学習や給食などを共にしている友達同士なので身近な生活の問題を見付けやすい。自分たちで自主的に活動するための問題などを見付けることができる。
係 活 動	学級の問題	創意工夫を生かした活動を行う学級の係活動だからこそ、学級の問題を基として、新たに作りたいもの、みんなで取り組みたいことなどの議題を見付けることができる。
委員会活動 (高学年の場合)	学校の問題	学校のための活動を常に行っている委員会だからこそ学校の問題を見付けることができる。場合によっては、いろいろな委員会を混ぜて編成することも可能である。

表3のようなグループを設定することは次のような価値がある。

- 目的が同じにして、活動をしているグループなので目的意識が同じ方向を向いている。よって、目的と現状を比較させて、問題を見付けやすい。
- 共に活動しているグループなので、仲間意識をもって学級や学校の問題を探ることができる。

（2）目的意識と仲間意識をもって考えをつなぐ評価の工夫

新たなわたしたちの生活をつくるためには目的意識をもって話し合うとともに、仲間意識をもちながら協力して話し合いを進めることが重要である。そこで、目的意識と仲間意識をもって考えをつなぐことができるようにするために発信した考えの価値を相互で評価するための仕組みを話し合いの中に設定するようにする（図6）。

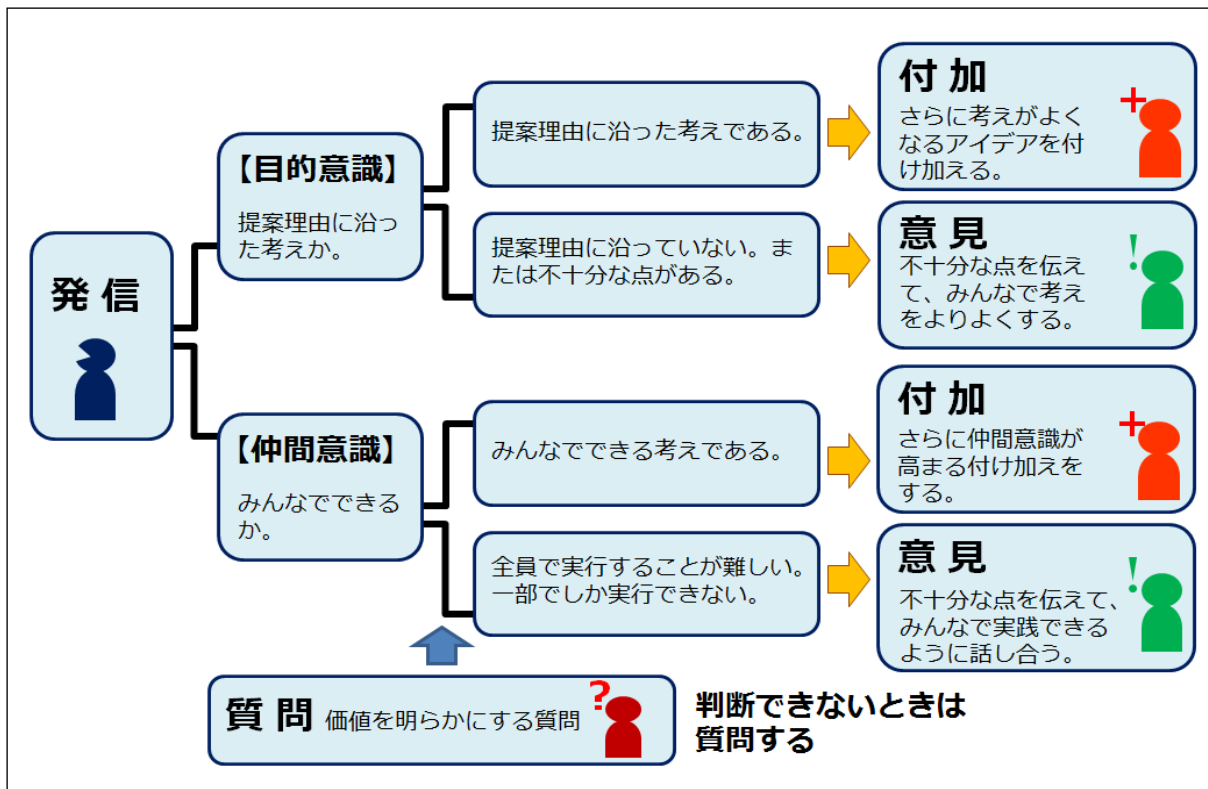


図6 考えをつなぐための評価システム

これらの評価システムにそって発言の価値を考える積み上げをしていくようにする。そのようにすることで、発言が単発になることなく、つなぐことが可能となる。はじめの段階では図6のシステムをシートにしたものを子どもにもたせておく。次にシートを見ないでも意識できるようにして、最後は型にはまらず発言の価値を正しく判断してつなぐことができるようにする。また、司会者も発言が続かないときは、この評価システムにそって話し合いを展開することが可能になる。

ここでいう発信された考えに対する評価は決して、考えに対して厳しい目を向けるためのものではない。発信された考えを学級全体でより目的に合うものにしていこうというものである。つまり、仲間意識と目的意識をもって話し合いを行うことを意味する。

(3) 知恵を出し合い考えをよりよくする板書の工夫

新たな生活をつくるためによりよい工夫を決定するためには、子どもがもっている知恵を引き出す必要がある。そこで、知恵を引き出すために板書の工夫を行う。

例えば、子どもから出される考えのつながりを矢印を用いて分かるようにすることで、さらに、実践のために必要なアイデアが分かるようにする。また、子どもの考えは移動できる短冊に書くことで操作化を図り、出されている考えを整理して、話し合いの過程が分かるようにする。

以上より研究構想を図7に示す。



図7 研究構想図

7 研究の実際と考察

(1) 実践 I における研究の実際と考察

学級活動 (1) ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

- ・ 議題 「みんなで楽しめる集会をしよう」
- ・ 実施学級 第3学年1組 29名

ア 実践 I のねらい

学級全体では、十分に仲良くなれていないという問題を解決するために、発信、意見、質問、付加といった過程を経る話し合いにおいて集団決定を図るとともに、決まったことに基づいて実践することができる。

・・・実践 I において目指す生活を拓く子どもの姿・・・

- 今現在、学級において、みんなで仲良く過ごすことができていないという問題をとらえて、その問題を解決しようと思い、話し合い、実践することができる。 【目的意識】
- 学級の友達と一緒に現在の学級の問題を解決したい、一部の友達同士ではなく、学級全体で仲良くしたいと思い、話し合い、実践することができる。 【仲間意識】
- 子ども自身の力で、学級全体が仲良くはないという問題を解決を図り、これまで学級にはなかった新たな集会の方法を考え、実践することができる。 【生活の充実・向上】

イ 研究の実際と考察

(7) 事前の活動【生活を考案する過程】

・・・事前の活動のねらい・・・

生活班を活用しながら、学級全体が仲良くないという問題を、学級全員でとらえて、解決したいという目的意識をもって議題を決定することができる

○ 実際

本実践において、議題を決定するために生活班を活用した。本学級の子どもは学習中のグループや給食時間などで生活班において、「けんかが起きてしまうことがある」といった問題をとらえ、解決したいと感じているようであった。

そこで、生活班を活用して、問題を発見して、議題を考える時間を設定したところ、図8に示すような議題の候補があがった。その中の議題候補Cを基に、日頃から問題意識をもっている、全体で仲良くできていないことをとらえて議題化を図るようにした。

○ 考察

生活班では、日常の学級生活を一緒に過ごしている子ども同士のため、一人一人でどのような問題があるかを考えるよりも、子どもたちにとって問題を見つけやすかった。

議題候補A「学級の旗を作ろう」

3年生になって新しいクラスになってみんなでやりたい。みんなで作ることができそう。

議題候補B「学級の歌をつくろう」

歌を歌うと元気もいっぱいになるし、ちょっとまちがっても助け合ってやさしさもふえるから。

議題候補C「スポーツ集会をしよう」

みんなが楽しめて運動にもなる、みんなでいろいろな話もできる。ルールを守りながらすることもできる。

図8 候補となった議題とその理由

(イ) 本時の活動【生活を熟考する過程】

・・・本時の活動のねらい・・・

目的意識と仲間意識をもって考えをつなぐ、子どもによる評価や板書の工夫を通して、学級全体がなかよくないという問題を解決するための方法、役割を集団決定することができる。

○ 実際

・・・学級会の概要・・・

- ・ 議題……………「みんなで楽しめる集会をしよう」
- ・ 提案理由……………みんなで助け合って、やさしさがふえるようにしたいから
- ・ 話合いのめあて…自分の考えを発表しよう。
- ・ 話合いの観点
 - も（目的）…みんなで楽しめるか
 - み（みんな）…みんなでできるか
 - じ（実際）…実際にできるか

話合いの柱1 「どんな工夫をするか」

話合いの柱1はいわゆる「どのようにするか」に関するものである。「何をするか」についてはドッジボールをすることを全体で確認した。また、本時においては、学級会の概要に示した三つの話合いの観点を設定した(図9)。目的性、相互性にそって発信される考えや意見は、目的意識や仲間意識をもつものだと言える。

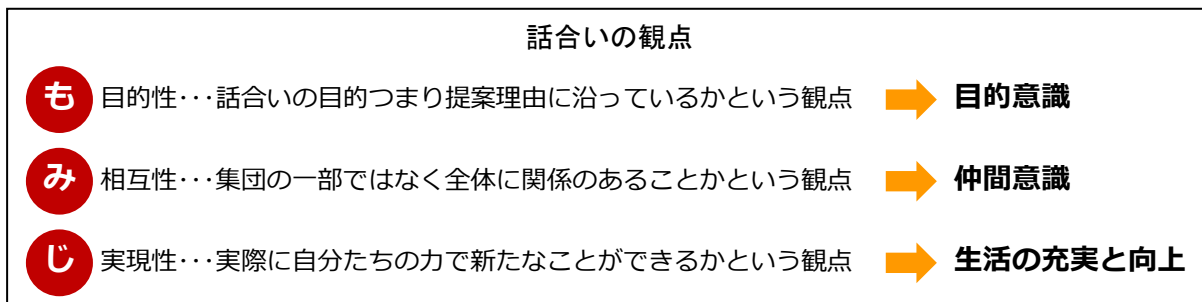


図9 話合いの観点

ドッジボールの工夫については事前に学級会ノートに書いてから、本時に臨むようにしていた。学級会ノートに書かれていた考えを整理すると表1のようになる。表3は学級会ノートに書かれた子どもの考えの一例であるが多様な考えが見られた。

表3 学級会ノートに書かれた考え

	ドッジボールの工夫
目的意識にかかわる 考え	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一回ボールを投げる。 ・ あたったらもんくを言わないくふう。 など
仲間意識にかかわる 考え	<ul style="list-style-type: none"> ・ チームは、男女でわかれなくていっしょにする。 ・ ボールがあたったら、タッチしてまた遊べるルール。 など
生活の充実と向上に かかわる考え	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最後に残った人に賞状やメダルをあげる。 ・ リーダーを決める。 ・ 勝ったチームはメダルを一個もらえる。 など

話し合いでは、学級会ノートを書かれたことをもとに考えを出し合っていた。話し合いの柱1は、どのような工夫をするかについて話し合ったが、工夫の内容の多くは「ルールに関すること」と「チームわけに関すること」の二つに分けられる。また、「ドッジボールがうまい友達が教える」といった仲間意識にかかわるルール以外の考えも見られた。

ルールに関することについては、「何回まであたってよいかを決める」「時間を決める」「外野の人数を決める」といった話し合いの観点の実現性にかかわる考えが多く出されて、決定した。

チームに関することについては、赤白チーム（※男女混合の運動会のチーム）にするという考えから始まる話し合いが図10のように展開された。熟考サイクル①においては、「チームの強さに偏りがある」という意見から男女別という新たな考えが付加された。しかし、次の段階の熟考サイクル②において男女別では「数にも差がある」という意見が出され、ここで話し合いが行き詰まった。つまり、熟考サイクルが回らない状態になってしまった。

そこで、図10-㉞に示すような「考えパワーアップシート」を活用した。このカードは、一人一人の子どもに持たせるようにしていた。

カードを使うことで、話し合いの中心となっている考えが「提案理由に合っているか」「みんなで力を合わせてできるか」という観点をもたせるようにしている。つまり、目的意識と仲間意識を再確認させるカードとなっている。このカードを用いたことで、図10-㉟のように、新たな考えに基づいてチームについて決めることができた。また、その理由も提案理由に基づいた目的意識が明確なものとなっている。

話し合いの柱2 だれが何をするか

柱2の誰が何をするかという、話し合いは柱1で決まった、「赤白を基にしたチームにする」ことなどに基づき、実際の集会の様子を想像して、チーム分けや集会の司会を集会係が行うことを短時間で、決定することができた。



図10 「赤白のチーム」から始まるサイクル

○ 考察

話し合いの観点を設定したことは、話し合いの考えの理由や意見の内容から目的意識、仲間意識、生活の充実と向上を意識させるために有効であったと言える。

熟考サイクルを機能させる話し合いを展開したことで、提案理由に合ったチームを決定することができた。熟考サイクルを機能させることができたのは、子どもによる評価する時間が設定されたからである。この評価する時間に「考えパワーアップカード」を用いたことで、目的意識と仲間意識を再確認することができた。

(ウ) 事後の活動【生活を創出する過程】

事後の活動のねらい

赤白を基にしたチームでドッジボールをするといった決まったことに基づいて、生活の充実・向上を図る実践をすることができる。

○ 実際

学級会で決まったことに基づいて、集会係を中心に取り組んだ。ドッジボール集会の準備については、最も時間をかけて取り組んでいたのはチーム決めである。チームはドッジボールの勝敗を左右するものであるということはもちろんであるが、赤白を基にしてチームを決めることは学級会で時間をかけて話し合っただけで決めたことだということを考えてチーム決めに取り組んでいるようであった。また、集会係がチームを決めることは、みんなで話し合っただけで決めたことでもある。そして、プログラムづくりなどにも積極的に取り組むことができていた。

ドッジボール集会の当日は、柱3で決まったことに基づいて集会係が司会をして、教師の力を借りることなく自分たちの力で集会を進めることができていた(図11-1)。

係以外の子どもも、ドッジボールを楽しんでいた(図11-2)。集会の中でやさしさや助け合いが増えるようにとドッジボールをするとともに、図11-3のように温かく応援している様子も見られた。

○ 考察

本時において、目的意識と仲間意識を明確にし話し合いを行ったことが、実践にもつながっていた。集会後の感想にも「応援してもらってうれしかった。自分も今度はそうしたい。」といった、今後の実践にもつなぐことができるようなものも数多く見ることができた。



図11 事後の活動の様子

(2) 実践Ⅰの考察及び手立ての修正

ア 実践Ⅰの考察

実践Ⅰで目指す子どもの姿と手立ての関連から工夫ごとに以下のように有効性を考察する。

○ 議題選定のためのグループ構成の工夫の考察

議題選定のために実践Ⅰでは生活班を活用した。生活班を生かして、自分たちの問題をとらえた議題を先制することができ、目的意識を高めることにつながり、有効であった。

○ 目的意識と仲間意識をもって考えをつなぐ評価の工夫の考察

熟考サイクルを活用して評価を適切に取り入れたことが、提案理由といった目的意識を明確にするとともに、「考えパワーアップシート」を話し合いの中、小グループで活用を図ったことは、仲間意識をもたせることにもつながった。

一方、「考えパワーアップシート」は汎用性をもたせるために図10-⑦のようにしたため、子どもには、目的意識と仲間意識を再確認させるだけのツールに止まってしまった。

○ 知恵を出し合い考えをよりよくする板書の工夫の考察

十分に機能させることはできなかった。話し合い中に出される考えや意見を板書する方法を単純化して、学級会の中で機能させるように改善が必要である。

イ 実践Ⅱに向けた手立ての修正

そこで、実践Ⅱにおいて次の二点について、以下のように改善を図る。

改善案A 目的意識と仲間意識を高めるためのカード

図12に示すようにサイクルの中で評価を行うためのカードを「考えパワーアップシート」から「スマイルカード」へと改善を図る。スマイルカードの使用方法は図12の①～③に示す通りである。また、「スマイルカード」となり期待される効果は以下のような点である。

- ◎ 期待される効果1…5段階で評価することで、その理由から考えを深めることができる。
- ◎ 期待される効果2…具体的なアイデアを記入することで考えを広げることができる。

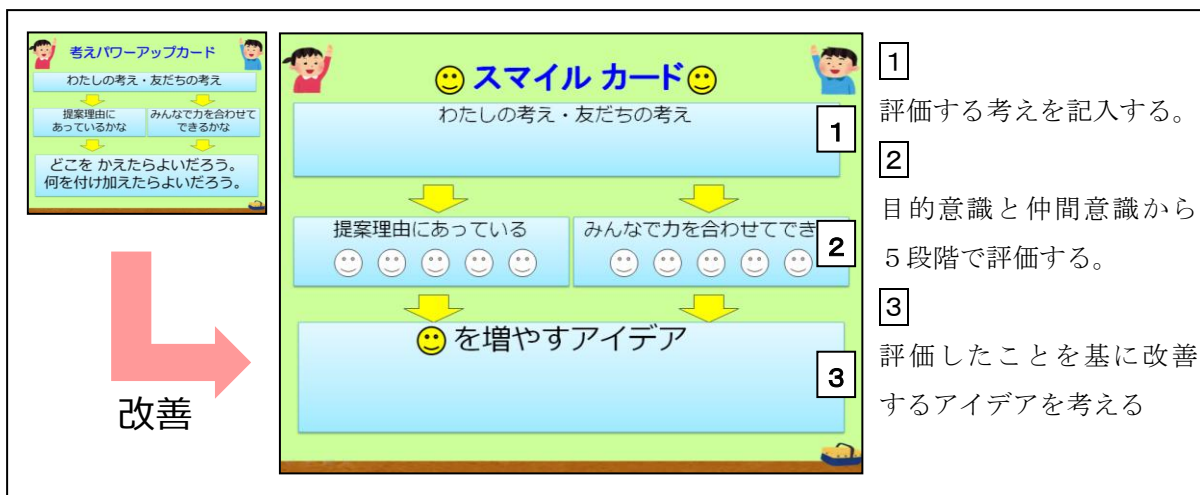


図12 スマイルカード

改善案B 知恵を出し合う板書のための見える化

子どもの実態に応じた板書の構成を改善して以下の2点から「見える化」を図るようにする。

- ◎ 考えと意見の配置場所の工夫をして「見える化」を図る。
- ◎ 関係のある考え同士、意見同士、考えと意見を直接つなぎ「見える化」を図る。

(3) 実践Ⅱにおける研究の実際と考察

学級活動(1) ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

- ・議題 「えがおがふえる1学期がんばったね集会をしよう」
- ・実施学級 第3学年1組 29名

ア 実践Ⅱのねらい

学級全体に、もっと笑顔をふやしたいという問題を解決するために、発信、意見、質問、付加といった過程を経る話し合いにおいて集団決定を図るとともに、決まったことに基づいて実践することができる。

・・・実践Ⅱにおいて目指す生活を拓く子どもの姿・・・

- 今現在、学級みんなで笑顔になれる活動が十分にできていないという問題をとらえて、その問題を解決しようと思い、話し合い、実践することができる。 【目的意識】
- 学級の友達といっしょに現在の学級の問題を解決したい、一部の友達同士ではなく、学級全体の笑顔をふやしたいと思い、話し合い、実践することができる。 【仲間意識】
- 子ども自身の力で、学級全体の笑顔をふやしそうと、これまで学級にはなかった新たな集会の方法を考え、実践することができる。 【生活の充実・向上】

イ 研究の実際と考察

(7) 事前の活動【生活を考案する過程】

・・・事前の活動のねらい・・・

生活班と係活動を活用しながら、学級全体で笑顔になれる活動が十分にできていないという問題をとらえて解決したいという目的意識をもって議題を決定することができる。

○ 実際

本実践において、議題を決定するために生活班と係活動の二つのグループを活用して図13に示すように議題化を図った。係活動では実践Ⅰにおける集会の反省点などと生活班をもとにした議題カードに書かれた集会内容から、さらに学級の目標という三つの観点から議題を選定して、「けいどろ」(※追いかけるチーム、追われるチームの二手に分かれる鬼ごっこ)を内容とする集会をするという議題が決定した。

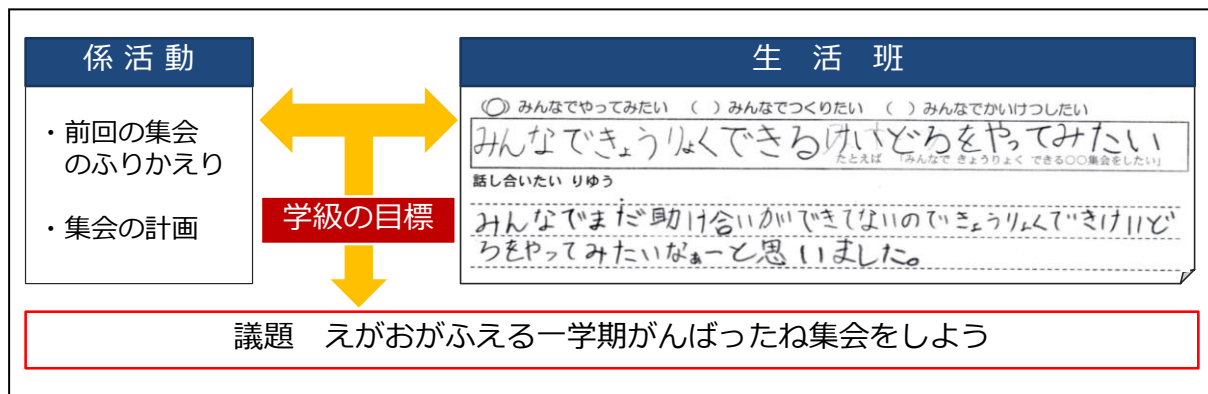


図13 係活動と生活班を生かした議題化

○ 考察

生活班に加えて係活動といった複数のグループを活用することで、より目的意識と仲間意識をもたせた議題を設定することが可能となった。

(イ) 本時の活動【生活を熟考する過程】

・・・本時の活動のねらい・・・

目的意識と仲間意識をもって考えをつなぐ子どもによる評価や板書の工夫を通して、学級全体に、もっと笑顔をふやすための方法、役割を集団決定することができる。

○ 実際

・・・学級会の概要・・・

- ・ 議題……………「えがおがふえる一学期がんばったね集会をしよう」
- ・ 提案理由…………… この前の集会では、あたりそうなのを守ったりおうえんしたりして、やさしさがふえました。今度はもっと元気にえがおがふえるような集会をしたいと思ったからです。
- ・ 話合いのめあて…えがおがふえる集会の工夫を決めよう
- ・ 話合いの観点
 - も（目 的）…みんなのえがおがふえるか。
 - み（みんな）…みんなでえがおがふやせるか。
 - じ（実 際）…じっさいにできるか

話合いの柱1 「どんな工夫をするか」

話合いの柱1は「どのようにするか」の話合いにあたる。事前の活動で「何をするか」は「けいどろ」を行うことを学級全体で確認していた。「けいどろ」は、子どもにとってなじみのある遊びであり、3年生になってから取り組んだことはないが、3年生までは何度もしたことがある遊びである。つまり、子どもにとって、実際の活動を想像しやすい内容である。そこで、本時の活動では、「けいどろ」をどのような工夫をして集会で行うかを話し合うことにした。

実践Iと同様に本時の活動の前に学級会ノートに考えを書く時間を設定した。学級会ノートに書かれた考えを整理すると表4のようになる。

表4 学級会ノートに書かれた考え

	「けいどろ」の工夫	
目的意識にかかわる 考え	・まちぶせをなしにする。 ・なかまがタッチしたら復活して逃げることもできる。	など
仲間意識にかかわる 考え	・おそい友達にあわせる。 ・男子は2回、女子は3回つかまってもいい。	など
生活の充実と向上に かかわる考え	・どこまでにげてよいか決めておく。 ・はさみうちはしない。 ・賞状をあげる。	など

これらの学級会ノートに書かれた考えが子どもたちが発信する考えである。つまり、サイクルの起点となるものである。工夫として書かれたものは、ほとんどがルールにかかわるものであった。子どももルールを工夫することで目的意識、仲間意識をもって話合いに臨むことができ、実践が生活の充実と向上につながると考えている。また、話合いの柱②の役割分担についても、実践Iに比べて司会やルール説明といった活動に加えて、けがをした友達を助けるといった仲間意識をもった具体的なものがふえていた。

本時の活動の中では以下のような、大きく二つの考えを中心に話し合いが展開された。

- ・話し合いの展開Ⅰ…「けいどろ」の中でどこまでを逃げる範囲とするのかの話し合い
- ・話し合いの展開Ⅱ…バリアの回数を何回にするのかの話し合い

【話し合いの展開Ⅰ】(図14)

「けいどろ」は鬼ごっこの一種であるため、どこまでを逃げる範囲とするかは重要なルールの一つだと言える。これは話し合いの観点の実現性から発せられた考えだととらえることができる。

・熟考サイクル①

熟考サイクル①の中では、まず「逃げる場所を決めるべきだ。」という考えが発信された。それに対して「遅い、速いで場所を二つに分けたらどうか。」という意見が出てきた。この意見の理由として「速さで分けられると、それぞれが楽しくできる。」というものであった。つまり提案理由にある「笑顔がふえる」に合致する目的意識がある意見だと言える。そこで、「遅い、速いはどうやって決めるのか。」という質問が出された。これは、遅い速いの決め方をきちんとしなければならないのではないかと評価していると言える。この質問に関して「その場で自分で判断する」「アンケートをとる」といった考えが出された。しかし「その場で判断する」は実際に「けいどろ」をしながらでは難しいことであり実現性の観点から合わない判断した。また、「アンケートをとる」ことは、他から速い、遅いと判断されることが仲間意識に反すること判断された。

・熟考サイクル②

熟考サイクル②においては、熟考サイクル①の話し合いを受けて、「そもそも遅い速いで逃げる場所を分けるのはどうだろうか。」という考えが出されフロア全体に発信された。この考えは提案理由にある笑顔がふやすという目的意識から発せられたものであり、仲間意識からも言えることである。そこで、「遅い、速いに関係なくみんなが楽しむことができるルールを考えよう」という意見が出され、「走り疲れたら、特別に休むことができる場所をつくっておこう」というアイデアが付加された。さらに「休む時間もきちんと決めておこう」という考えも付加された。

このように二つのサイクルの話し合いを見ると逃げる場所を決めるという実現性から始まった話し合いが、サイクルを機能させることで目的意識や仲間意識を明確にした集団決定が可能となった。

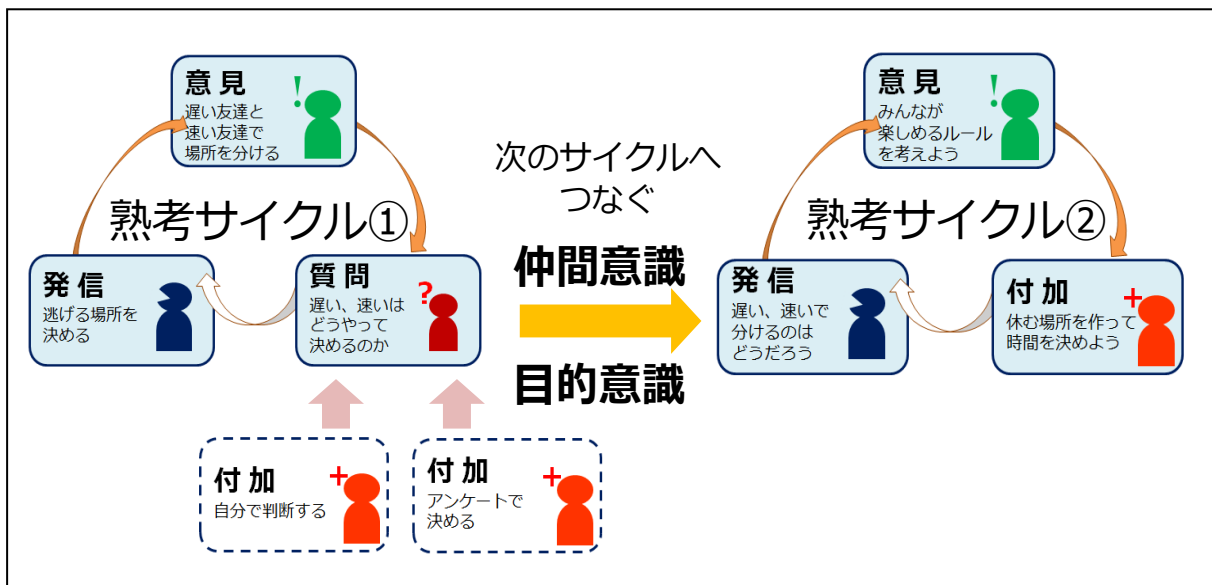


図14 話し合いの展開Ⅰ

【話し合いの展開Ⅱ】(図15)

話し合いの展開Ⅰの逃げる範囲というルールに加え、もう一つ議論となったのが「バリア」である。「バリア」とは、「けいどろ」をしているときに「バリア」というと一時的に鬼からタッチされることを逃れられるというルールである。

・熟考サイクル③

熟考サイクル③の中では、まず「バリアをする」という考えが発信された。それに対して「何回までするのか」という質問があった。回数をきちんと決めておかなければ、実際の集会のときにトラブルの原因となる。つまり実現性の観点からの質問である。それに対して、「男子は3回、女子は5回」という考えが付加された。考えを付加した子どもにとっては「男女の回数に差を付けることで男子も女子も楽しむことができるようにしたい」と考えたようであった。

・熟考サイクル④

しかし、「男女で回数に差を付けることが本当によいことなのか」という話し合いの展開になり、熟考サイクル④の話し合いに移行した。つまり、回数に差をつけることが「笑顔がふえる」という目的意識に沿ったものであり、「みんなで楽しむことができる」という仲間意識に、本当に沿っているかどうかということである。

そこで、「男子は3回、女子5回」という考えが仲間意識、目的意識という観点に合致しているのかを評価するようにした。このとき使用したのが実践Ⅰからの改善案Aとして示した「スマイルカード」である。スマイルカードを用いて、「提案理由に合っているか」という目的意識と「みんなで力を合わせてできるか」という仲間意識の観点から、議論となっている考えを5段階で評価するようにしている。図15に示している実際のカードでは、それぞれをスマイル2個とスマイル3個で評価している。つまり、必ずしも満足できる考えではないことを評価することができ「男子も女子も同じ回数にする」という考えにたどりついている。同様に考えた子どもが多数いたこと、この考えに納得したことから回数は同じにすることに決定した。

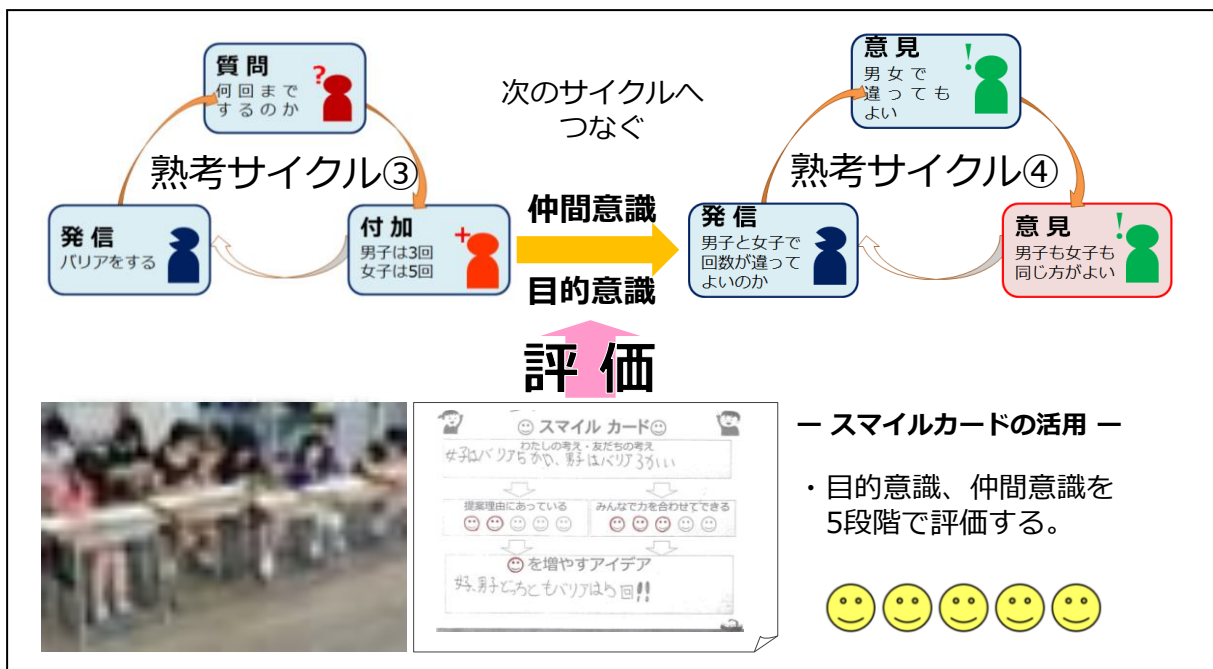


図15 話し合いの展開Ⅱ

話し合いの柱2 だれが何をするか

柱2の誰が何をするかについては、「鬼がつかまえた友達を見ておくのはだれがするのか」といったことを決定することができた。また、司会などを集会係が行うことも決定した。

○ 考察

スマイルカードを用いたことは、目的意識、仲間意識を一人一人が具体的な数値として評価することができ、生活の充実・向上を図る考え集団決定へとつなげることができた。

板書は図16に示すように自由に移動できる短冊を用いたり、関係のある考えや意見をつないだりして話し合いの見える化を図ったことで、多様な意見を引き出すことができた。

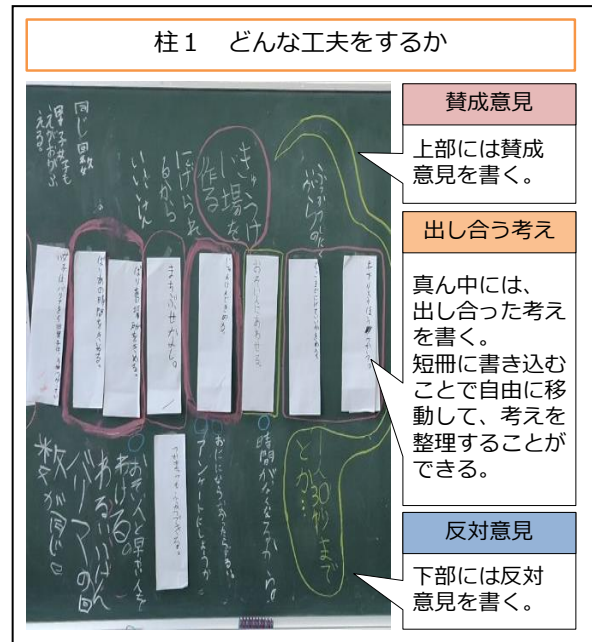


図16 見える化を図った板書

(4) 事後の活動【生活を創出する過程】

事後の活動のねらい

学級全体が笑顔になれるように決まった「けいどろ」のルールなどに基づいて、生活の充実・向上を図る実践をすることができる。

○ 実際

学級会後に、集会係を中心に準備に取り組んだ。集会係の子どもは、集会のプログラムや賞状を作成していた。また、賞状はどのチームにも渡すことができるように複数、用意していた。

当日は図17-1のように、準備していたプログラムを使いながらはじめの会を進行したり、ルールの説明をしたりすることができていた。

「けいどろ」のゲームは、提案理由の「笑顔で元気よく」とあったように楽しく活動することができていた(図17-2)。男子も女子も関係なく活動する姿から、「男子も女子も同じ回数」と子どもたちが集団決定したことは実践に合致していたことが分かる。

○ 考察

自分たちで話し合っただけで決めたことに基づいて集会を実践したことは、子どもたちの仲間意識を高め、学級全体に笑顔がふえるとといった、学級の雰囲気醸成し、生活の充実・向上へとつなげる結果となった。



図17 事後の活動の様子

8 研究のまとめ

(1) 全体考察

実践の事前と事後で4件法による質問法の調査を行った。調査は目的意識、仲間意識、生活の充実と向上にかかわるアンケートを「関心・意欲・態度」「思考・判断・実践」「知識・理解」の項目に分けて行った。結果は図18に示すとおりであり、数値は平均値を示す。

1 目的意識

いずれにおいてもポイントが上昇した。特に「思考・判断・実践」の部分は0.6ポイント上昇している、これは、目的を明確にして話し合いを進めるには、スマイルカードを用いてどのように話し合いを展開すればよいかを実践を通じて理解し、話し合いをすることができるようになったからだと考えられる。また、スマイルカードで5段階の評価を取り入れたことが具体的な実践方法を身に付けるための手立てとなった。

2 仲間意識

「関心・意欲・態度」は事前から高い数値を示していたが、さらに0.4ポイント上昇した。これは、事前の活動の議題選定において、生活班や係活動といったグループを活用したからだと考えられる。また、提案理由に「笑顔」や「助け合い」といった仲間意識にかかわるキーワードが入っていて価値ある議題を選定して、話し合いや事後の活動を行ったからである。

3 生活の充実・向上

いずれも上昇したが、「関心・意欲・態度」が特に0.6ポイント上昇した。これは、熟考サイクルを生かした話し合いが、現実的なものとなり、「今の学級の問題を解決したい」という気持ちが強まったからだを考える。また、話し合いで決定した「どのように工夫するか」「誰が何をするか」といった内容が、提案理由に合ったものであり、みんなでできるものとなっていたために生活の充実・向上への関心や意欲が高まったからだを考える。

以上のように、手立ての中でも生活班と係活動を活用した「議題選定のためのグループ構成」とスマイルカードを用いた意図的な評価を取り入れ、熟考サイクルを機能させた「目的意識と仲間意識をもって考えをつなぐ評価の工夫」が大きく作用して、目指す子ども像へと近づくことができた。つまり、これらの手立てが「目的意識」「仲間意識」「生活の充実・向上」といった生活を拓く子どもの育成につながったと考える。

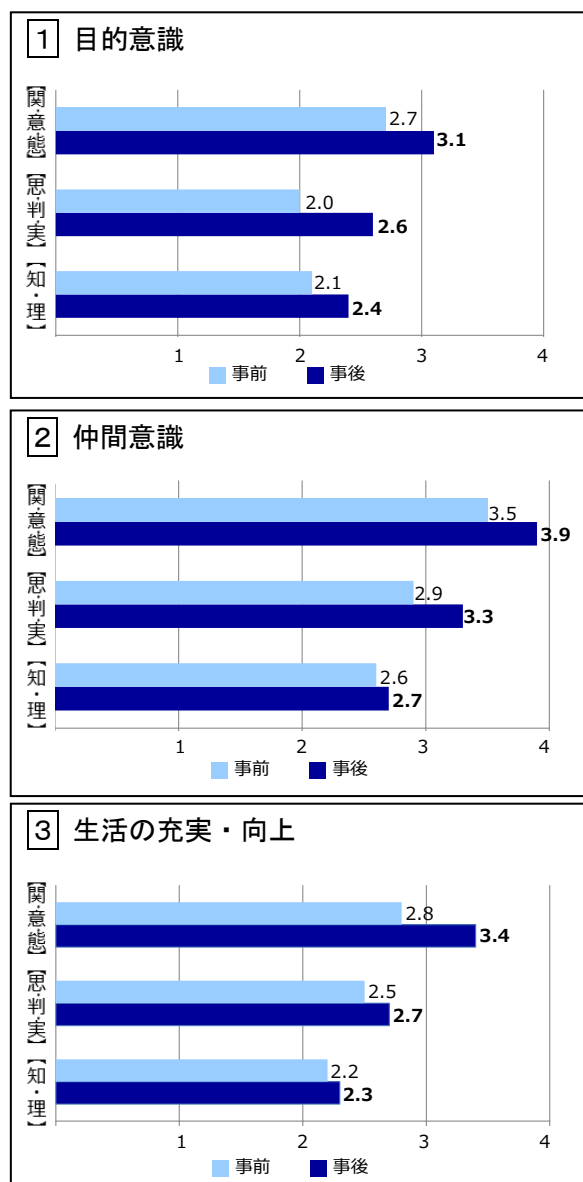


図18 質問紙法による調査結果

(2) 成果と課題

ア 成果

○ 適切なグループを用いた生活問題からの議題化

学級の現状をとらえて、適切な生活問題を見つけるために生活班や係活動といったグループを活用したことは有効であった。また、複数のグループを同時に活用したことは、異なった視点で生活をとらえることとなり、価値ある議題を設定することができた。

○ 目的意識と仲間意識をもたせた熟考サイクルによる話し合い活動

話し合い活動中での発言を、発信、質問、意見、付加といった種類に分け、一つのことをいろいろな視点から繰り返し考えさせることは、目的意識と仲間意識を明確にした発言につながるとともに、学級全体が納得する集団決定へとつなげることができた。

○ 具体的な数値化による考えの評価

熟考サイクルの中で、スマイルカードを用いたことは、友達の考えを仲間意識と目的意識という二つの評価の観点から明確にするだけでなく、5段階で評価させることで、その段階で評価する理由から、新たなアイデアを考えるための助けとなった。

イ 課題

● さらなる熟考サイクルの活用

熟考サイクルが機能する場面と十分に機能していない場面が見られた。話し合いの中で、熟考サイクルが機能する場面を、さらに増やして話し合いをより活性化させなければならない。

● 知恵を出し合う板書の整理

移動可能な短冊などを使って、話し合いの見える化を図るようにしたが、十分に機能させることができなかった。また、発達段階や学級会の経験に合う板書の方法ではなかった。

ウ 課題改善のための方向

改善案1 計画委員会による熟考サイクルの活用（※課題1の改善）

熟考サイクルをさらに機能させるためには、計画委員会の役割が大きい。つまり、熟考サイクルが機能していないことを司会や副司会が判断して、サイクルを回そうとしなければならない。例えば、適切な場面を判断して、「今の考えをもっとよくするためのアイデアはありますか」といった進行ができるように、事前の計画を充実させる必要がある。

改善案2 発達段階に応じた板書の構造化（※課題2の改善）

板書の技術は発達段階や学級会の経験によって、大きく左右される。そこで教師が、学級の子どもたちの板書の技術が、どの段階にあるのかを判断して、事前の活動の段階から計画委員会の子どもに指導するとともに、フロアにも板書の機能を理解させなければならない。

<参考文献>

- ・文部科学省（2008）「小学校学習指導要領 特別活動編」 東洋館出版社
- ・国立教育政策研究所教育課程センター（2012）
「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 小学校 特別活動」教育出版
- ・国立教育政策研究所教育課程センター（2014）
「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）-特別活動指導資料」文溪堂